絵本をつくるよろこび

佐久間彪

もう十二・三年前のことになります。わたくしはまだ学生で、西独のフランクフルトで勉強しておりました。朝から晩まで、ローマ字やカメノコ文字の哲学書にとりかこまれて、いささかノイローゼ気味でもあったある日、デア・クライネ・プリンツ（小さな王子）という本が私の前にあらわれました。ジャスミンの匂う英国風の庭に面した大学の一室には、毎週新刊書が本屋からもちこまれ、注文を待っているのが常でしたが、その中にこのさして厚くない、しかし少し大版の、一見して童話らしくおもわれる本がならべられてあったのです。わたくしは頁をめくるや、どうしても眼をそらすことができず、夢中になって、ついに読み終ると、これがフランス語からの翻訳であると知りました。そうするとどうしても原書がほしくなりました。

そこではるばる汽車にのってライン河沿いに北へ下り、ベルギーのリエージュにでかけ、市内のある本屋にはいりました。

そこで、ガリマール社出版のル・プティー・プランスを見つけたときのよろこびを今でも忘れることはありません。本屋の美しい女店員さんが、私の日本人であると知って、割引きをしてくれたことも、印象を深くしたことの一因かも知れません。以来、ル・プティ・プランスは、かたときも手放しませんでした。さいわい、今は日本でも藤濯先生の立派な訳でしかも原本に負けない美しい表装で、「星の王子さま」としてあらわれています。

わたくしに童話とか、絵本とかのつながりができたのはこの王子とのであい以来であるとおもいます。

それにしてもアマチュアというものは良いものです。アマチュア

の語源はフランス語、さらには遠くラテン語のアマートルにあって、愛する者、という意味のようですが、愛がなければアマチュアということはできません。単に「好きでやる」というのは、「愛してする」ということと大分異っていると思うのは間違っているでしょうか。

絵本を愛するということの前提には、子どもを愛するということが当然なければなりません。ここでも子どもが好きだということと、子どもを愛するということは必ずしもいつも同じことだとは思えません。実は、わたくしは、正直に申しますと、子どもがそんなに好きではないのではないかと思うことがあります。キリストは「幼な児のようにならなければ天国に、はいれない」と申しましたが、しかし幼児の世界にももう大人の世界の悪い面、いやな面がもう芽生えています。しっと心などは全くもう一人前です。それに自分が保護されることを要求することまで知っている、一種のわがままもあります。しかし、それにもかかわらず子どもを愛するこころでは、わたしも人後に落ちないようにも思います。

言葉の世界には、いわゆる原始語（Urwort）ともいうべき言葉があります。たとえば「こころ」とかいうたぐいのものです。言葉が分化されてしまっている大人の世界の特殊な事情に生活しているとき、やはり子どもの未分化の言葉の重みをあらためて感じなおしますし、忘れていた「かんじん」なものをそこにもう一度みつけだして、子どものこころの芽を摘むまい、いやむしろ手をかしてやろうと決心することになります。わたくしが絵本の仕事に、いわばアマチュアとして参画したのはこんな気持ちからでした。

それにしても、こんなに楽しいことはそう数あることではあるまいと思います。わたくしの分担するささやかな仕事は、ストーリーを構成したり、小さな詩をつくったりすることに過ぎませんが、はったりのない言葉、否むしろはったりがあってはならない文章を書くことは、努力もいるかわりに何ともいえないたのしみです。それにリズムのある文をつくるときには、（ごぞんじのように、子どもにはリズムがなければなりません）ちょうど自分でもダンスをおどっているような感じで、緊張した精神もほぐれてきます。大人のわたしが、ふだんなぜこんなに、固くきたない言葉を話し、書いてきたのかと思うほどに、やさしい言葉は人間らしい魅力をもっています。感ずる魅力ほどには美しく書けないなやみはいつまでも残りますけれども。

それにしても、うらやましいのは絵かきさんたちです。プロとしてのなやみはあることでしょうが、やはり絵本つくりには第一番の立役者です。その絵書きさんたちが、どれほどこの仕事に夢中であるか、ということは、やはり子どもの心の中に美しさの芽を感じて

いるからでありましょう。

わたくしのお手伝いしているのは、「こどものせかい」の仕事ですが、年に一度ぐらいそのスタッフや絵かきさん、詩人がたがあつまって和気あいあいのひとときを過すことになっています。それは何ともいえないたのしい時間です。皆一生懸命に童謡などうたって、だれもが子どもを愛しているということがよくわかります。

童話、絵本には、よくアレゴリー（寓話）、が使われます。人間を動物や植物にたとえたり、不可能なことを可能なことにしたり、です。これは一見非科学的ですが、実は無理できない重要な要素を含んでいると思います。リアルであるということは、それ自身大事ではありますが、具体的であるというだけでは物事の本質を見透すことにならないと思います。本当のリアリズムというものは、時としてリアルでない表現形式をとるものであると思います。具体的な一事例は、明確ではあっても一義的で、誰もがその世界にはいって行くことはできません。その点でアレゴリーにはある種の普遍性があり、まして子どもにとっては理解をたすけると同時に情緒に訴えるものがあります。そこで、題材を選ぶまじめな努力がいるわけで、そのようなものを新しく造りだすにあたっては、少しぐらい脳髄をしぼりだしても、喜びこそ多けれ、悔いは残らないというものです。それにつけても、絵と文のタイミングが合った時には、本当にうれしい気持ちです。

わたくしは、絵本の製作者ではありませんので、本当の苦労はよくわかりませんが、絵本づくりで大変なのは、また、印刷技術なので、絶えず紙質や製版、インキなどの技術を開発していかねばなりません。美しい色はたくさんの技術者の努力から再現されていきます。紙が違うだけで、こうもちがうものかと、目をみはることが屢々なのです。あるとき製版の仕事をうけもつ方のお話しを伺いましたが、どれほどこの仕事に情熱を注いでおられるかを知って、真底からうれしくなりました。

おわりに、わたくし自身、厳に自らをいましめたいと思っていることは、絵本や童話を、教訓や知識教育の単なる道具にしてしまうということです。よくナンセンス、と申しますが、真にナンセンスなのはむしろあからさまな「単なる道具」主義なのではないかと思います。本当の幸福とは何か、ということがもしここで問題になり得るならば、その絵本を見るだけでおとなもこどもも幸福な思いになれる、というような絵本をつくりたいとおもいます。冒頭に思いだした小さな王子の小さな星の世界は、そのような心の世界で、「ブリッジ遊びや、ゴルフや、政治や、ネクタイの話し」だけでは通じないところにあります。そんなところに通じているそんな絵本、そんなものができたらと思っております。（カトリック司祭）